

明かとなつた。そこで次に來たる問題は、合理的思想又は動の見解の基礎となるものは、果して何かといふことである。それは即ち見聞であるとワードは答へる。

ワードはこれが研究と並んで、理知及び知識の性質についても、極めて興味ある論究を興へてゐる。以下、その大要を紹介する。

そもく、^{インテリジェント}理知なるものは一つの精神力であり、^{ナレッジ}見聞とはこの精神力が働きかける所の材料である。而して此等の二要素の結合したものは即ち^{インテリジェンス}知識である。社會は知識の増進を要求してゐる。そこで、この知識の増進が如何にして得られるかを見出すことが問題となる。知識は理知と見聞との結合に依つて成る所の複合體であることは上述の通りであるが、然らば知識の増進を目的とする場合、此等の兩要素の何づれをヨリ多く必要とするかといふ問題が生じて來る。我々は理知を充分に持つてゐて、見聞に不足してゐるか、又は見聞は有り餘るほどあつて

理知に不足してゐるか。この間に對する回答の如何によつて、理知へか見聞へか我々の力の入れどころが異なつて來るのである。この問題を解決するに當り、我々の眞に缺乏してゐるところのものが果して何づれであるか、またこの缺乏を満たすには、如何にすればいいかを見出さなければならぬ。

ワードの説く所に依れば、我々は理知の方面に於いては少しも不足して居ない。近世社會に於ける多數民衆の理知能力は、現在又は近き將來に於ける一切の要求を充たして尙ほ餘りあるものである。これは勿論、文化の程度低き種族に對しては言ひ得ないことであるが、少なくとも歐米諸國民に對しては充分に斷言し得る所である。

「西歐諸國民の理知は、將來更らに莫大なる自然的眞理を容易に消化して同化し得る所の餘力を持つてゐる。この點に於いて、西歐と亞米利加との間には極めて著しい差が存してゐるとはいへ、彼等がいづれも自然的眞理を充分に把握し得る

力を持つてゐることは共通してゐる。異なつた國民と國民、異なつた地方と地方異なつた自治體と自治體、異なつた個人と個人との間に於ける主なる差異は、彼等が知ることと存するのであつて、知り得ることに存するものではない。著しく異なつてゐる點は知識の程度であつて、理知の程度ではない。文化の後れた地方及び國民の缺陷となつてゐる所のものは、見聞の缺陷に外ならない。世界に存する主要な錯誤及び害悪は、それ〴〵無知なる一點に共通の起原を有してゐる。』

ウオードの此主張は、理知を以つて萬人平等なりとし、而して知識の差は一方の理知が他方の理知に比べてヨリ多くの見聞に立脚してゐるといふ一點に求められんとするヘルヴェチウスの主張に従つたものである。都市に於ける知識の程度が『農村地方に於けるそれに比べて遙かに大きいことは人のよく知るところである。これは決して、都會人の理知能力がヨリ大であることに基くものではない。この點に若し何等かの差異があるとすれば、恐らくは反對であらう。田舎の子供を都

會につれて來れば、忽ちにして都會兒となつてしまふ。』知識について都會が重要となつてゐるのは、都會の談話や、新聞や、讀書や、思惟などの空氣が重要となつてゐることに外ならないのである。

『抱負ある青年が辛うじて教育の初歩を與へられ得るに過ぎないネブラスカの原野を初めとして、毎夜群れなす人々が、科學上の大家によつて試みられる諸種の専門講義を聴きに集つて來る所の倫敦、巴里などの如き偉大なる生活中心地に至るまで、その間には等一なる理知が見聞を獲得し知識を向上させる爲に享受する機會の上に、程度上の凡ゆる差別が存在してゐるといふに止まる。』要するに理知能力を増進せしめんとする一切の努力は、無益の勞に歸する譯であつて、理知能力なるものは現在に於いても既に凡ゆる實際上の目的にとつて十分に普及し、充分な程度を以つて存在してゐるのである。そこでウオードは、既に斯く充分に存在してゐる理知を増進せしめる爲に無益の努力を費す必要はないと主張し、我々

の努力は寧ろ、知識増進の目的にとつて不足してゐる所の唯一要素たる見聞の増進に向けられねばならないと要求してゐる。即ち次の如くである。

「知識こそ眞の標的である。それは理知と見聞との適當なる結合に依つて、與へられるものである。されば此等の兩要素の一つが他を超えて増大せしめられるとき、かかる増大は無効に歸してしまふのである。然らば何故、一つを無視して他を増大せしめんとするのであるか。一定の比例を以つて結合するところの二要素から成る化合物を多量に得ようとするとき、その一方の量を變化せしめずして、他方のみを徒らに増大しても目的は決して達成し得るものではない。化合せざる價値なき混合物を以つて容器は充満されるかも知れないが、かかる容器は何ものをも代表しないのである。人類の心的進歩についても同様である。兩要素中のヨリ小なるものの最高度状態によつて代表された知識の追加だけが、計算に入るのである。」

問題が此所まで來れば、その解決も左程困難ではない。若し各社會階級の間に經濟上の利害對立がないとすれば、解決は易々たるものであらう。反對に、不足分子が若し理知能力であるとすれば、問題の即時解決といふことは到底望まれないこととなるであらう。蓋しワードも指摘してゐる如く、我々の理知能力はただ腦髓の量と構造とを變へる事に依つてのみ増大し得るのである。これは生物學上の問題であつて、非常なる長期間を必要とする一過程である。凡ゆる有史時代を通じて此方面に現はれた變化は、極めて微々たるものであり、取るに足らざる一少量に限られてゐる。

「人類が最も困難な問題の解決に着手する場合に於ける大膽な態度の中には、一種の武者振りがあつた。これについて標本的の一例となるものは、人間の理知を發展せしめようとする企圖である。從來、この問題が「教育論者」に依つて解決に着手された熱心及びその結果は、さながら風車と戦つたドンキホーテの態度を彷彿

佛たらしめる。これらの熱心な改革者は、問題解決上の眞の方法を暗示する遺傳の大法則については全く無知であり、問題の難關を正當に評價せしめる自然的進化の學說には大抵反對であつて、ひたすら空氣や海を打つことを續け、かくすることに依つて眞に風や浪を退治してゐるのだと想像してゐる。』

理知力を増進せしめることは、今のところ絶對的に必要な條件ではないにしろその方法を考へて置く事は決して無益でない。ワードは斯かる方法の可能を論證してゐる。人類は自分自身の改善よりも、家畜の改善に長じてゐる。家畜の飼養に應用されてゐる如き如何なる科學的原理も、これを人類の養育に應用するといふ段になると、忽ち諸種の困難に逢著するを免れない。そは兎にかく、人類の理知能力を極度に發揮させる爲には、これに見聞の適當な材料を供給することが必要であるが、同時にまたヨリ高級な理知力を發達させることも必要になつて來る。それには如何にすればいいか。從來の教育は、謂ゆる『理知操練』以上には一

歩も出でて居らない。これだけで、人間の理知力は發達し得るものと信じられてゐた。ワードはこれに就いて次の如く論じてゐる。

『心意の發展につき從來主として應用されてゐた組織は、適切に理知操練と呼び得る所のものである。これは輕業師が身體の輕敏を訓練すると同一の方法に屬するものであつて、豫め準備した問題を基礎として理知を訓練するのである。理屈の仕合と模擬的な論戰とが一般に行はれて居り、種々なる形態の逆上の口論が最高級の教育機關に於ける通例の訓練とされてゐる。斯くして眞の目的は不必要なものとなされ、嚴肅な生活以外には意味のないものとして遠ざけられることとなつた。青年の柔軟な心意は、これに依つて展開され、全く異つたものになると信じられてゐるのであるが、事實は寧ろ餘りに磨滅されて、後年の實務に役立たなくなつてしまふのである。』

ワードは此問題についての全論究を、次の如く摘要してゐる。

「一、現在の文明人種中に充分組織立てられた社會組織を樹立し、以つてこれを指導するには、從來知らず識らず發達し來たつた程度の理知能力で充分である。」

「二、この發達を人爲的に促進しようとする一切の企圖は、種々なる大困難に逢著しなければならぬ。而して首尾よく之れを達成するにしても、その間には何百年といふ程でないにしろ兎にかく非常に長期の時間が経過されなければならぬ。」

「三、この目的を達成し得る方法は二つしか無い。その一は人爲淘汰に依る科學的の人類改造（この方法は種々なる實際的の障礙に逢著する）であり、他は環境の合理的變更といふことである。而して此後ちの方法は、理知のためにヨリ多くの、またヨリ適當なる作用材料を供給するといふ點に存し、見聞の増殖を目的とするものである。」

「四、社會の平均心意に依つて保有されてゐる有用な見聞の量は、理知能力より

も遙かに小である。随つて知識の程度は、現實に於いて到達し得べきであつた程度よりもそれだけ低い所に止まつてゐる譯である。」

「五、人類に依つて造り出された斯かる知識の現實的な大さは、これを利用し得る理知能力よりもヨリ小である事は疑ひを容れない。然しこれを均等に配分すれば、人類を比較的高き地位に引き上げ、社會を完全な自覺に覺醒せしめるに不足する所はないのである。」

「六、見聞の増殖は困難にして且つ遅々たる行程であるとはいへ、それでも理知の増殖に比すれば容易にして且つ迅速であり、將來に於いて後者と進行を一致せしめることは困難でない。」

「七、以上諸種の要求條件のうち最も直接的に重要であり、且つ完成し易いものは、既に存在してゐる所の重要な見聞を広く普及せしめることである。」

倫理的の見解及び見聞に關するウォードの學說の紹介は後日に譲り、茲では専ら

彼れの動的見聞説を摘録することに努める。

進歩を生ずるものは動的行動のみであり、進歩的行動を生ずるものは動的見解のみである如く、それと同様に又、進歩的見解を喚び起すものは動的見聞のみである。科學的の見聞は必ずしも總べて動的であるとは限らないが、動的の見聞は總べて科學的性質を有してゐる。科學的見聞は、伏能的に動的なるものと、現實的に動的なるものとの二種に分かたれる。科學上の發見が結果に於いて動的となり得るか否かを豫測することは不可能であるから、科學的眞理は最初それ自身爲に追求されなければならぬ譯である。科學上の研究が、最高級の人心にとつてのみ興味ある問題となる所以は此所にある。それは直接に物質的の結果を齎らすことがないから、常人の目には極めて迂遠な、六かしい、實生活に關係のないものの如く見えて來るのである。ウァードは一例としてガルヴァニが蛙の足について試みた實驗を擧げてゐる。この實驗は當時何等の價値もないものの如く見え

てゐたが、後ちには電信發明の基礎たるべき重要な原則となつたのである。

人類に自然の材料や力を利用して、直接社會的進歩に到達せしめる如き見聞は、總べて嚴密なる動的見聞といふべきであつて、蒸氣や電氣の發見、その他近世文明の基礎たる諸技術の源泉となつた見聞は、いづれも此部類に屬するものである。次に伏能的に動的なる見聞は、太陽や恒星や星雲などの構造に關する研究天文學上及び物理學上の絶大な距離に關する研究、生物學に於ける人類由來の進化論的研究、その他人類の見解を擴め人心を豊富にして、これをヨリ高き思想及び行動の水準に向上せしめる所の全研究を含んでゐる。斯種の研究は直接に進歩的の結果を齎らすことがないから伏能的と呼ばれるのであるが、實質的には動的性質のものと見做し得るのである。

ウァードは最後に、見聞の普及に就いて興味ある一研究を與へてゐる。彼れは曰く「見聞の力を作用せしめる爲には、それが心意に包有されてゐることを要する。

この命題は重語でないまでも、少なくとも自明の眞理と見られ得るであらう。が少數の個人に屬する見聞も萬人の利益になるといふ信仰ほど、公然でないまでも暗黙の間に流行してゐる信仰はない」と。ウァードは更に此信仰の錯誤を指摘して曰く、「我々が他人の見聞を見聞き得ないことは、恰も他人の飲食を飲食し得ない如くである。或る一人の人の見聞は彼れを一つの慈善家にするかも知れない。然しそれは他の一人の無見聞が、彼れを一つの犯罪者にすることを妨げるものでない。一つの階級をして道徳的な方正な市民たらしめる見聞は、同一の見聞を有せざる他の階級の不徳を矯正する上に何等の影響もあるものではない」と。

ウァードは更に一步を進めて現在の社會的不平等を論じてゐる。「愛他的道徳が行はれて、一切の事物が變革され、何人も自己の幸福を措いて先づ他人の幸福を増進せしめようとする如き黄金時代の夢に耽つてゐる人々は、終極に於いて絶望に陥ることは必定であり、且つ當然でもある。現存組織の下に如何なる改善が

行はれるにしろ、それは必ず均等なる自衛の發達に立脚すべきであつて、多かれ少なかれこの目的を達成するには決して愛他心の發達に俟つべきではない。」

彼れは更らに論じて曰く、今日、資本家が労働者に比べてヨリ有利な地位にあるのは、資本家の知識が優れてゐるからである。而して資本家のために此知識上の優越を許してゐる見聞普及の不均等は、「潔白と廉直とを犠牲にして、利己心の目的を達成せしめる」ことに於いて、社會に積極的の損失を與へるものである。そこで労働者を此不利益な地位から救ひ出すには彼等にヨリ多くの見聞を貯えしめる外はないといふことになる。斯くすれば、彼等は此見聞を既に充分存在してゐる所の理知能力に加へ、以つて一つの自衛的知識を造り出すことともなるであらう。

六、教 育

幸福が進歩の結果であり、進歩が行動の結果であり、行動が見解の結果であり、而して見解が見聞の結果であることは、上段述べた通りである。そこで残る問題は、直接見聞に導く所の道程となるものは果して何かといふことである。ワードは『教育』の一語を以つてこれに答へる。從來教育に就いては種々なる研究が發表されたが、ワードの研究は其間にあつて確かに一頭地を抜いてゐる。

勿論、教育といふ言葉は決して充分ではなく、比較的無難だといふに止まる。それは語源から見ても、また實用上から見ても、充分な言葉であるとはいひ得ない。先づ語源からいへば、教育即ちエデュケーションとは、『心意のデッロイニングアウト』(引き出し、即ち展開)を意味してゐる。これに基いて、世人はいろいろな定義を與へてゐる。例へばボビュラー・サイエンス・モンスリー誌の記者は、『教育とは人の諸性能を發展せしめることである』と言つた。またクリフォード・オルバット博士は曰く、『教育の眞の目的は身心の訓練を與へるにある』と。更らに

教タイムス紙に現はれた一論文の中に曰く、『嘗ては教育を以つて、機械的に壓縮された事實を知らしめ、かくして理知を擴張せんとする所の努力といふ風に解してゐたかも知れないが、今日では人類の生命過程の上に有利な影響を及ぼす所の努力といふ風に定義さるべきである』と。

此等の定義はいづれも教育の眞の職能を認めない不完全な見解に基いてゐる。ワードは此等諸種の定義を綜合分析して、次の分類表を作つた。

- (一) 經驗の教育
- (二) 訓練の教育
- (三) 修養の教育
- (四) 研究の教育
- (五) 見聞の教育

右の中經驗の教育は問題の如何に依つて唯一の可能的教育とも見られるし、ま

た全く無くてもいいものとせられ得る。且つこの方法には多くの費用を要するから、一般的には實行し難い。これに對するウワードの批評は、左の一語に概括され得る。曰く『經驗は價高き學校であるとはいへ、愚者を教育するには他の學校を以つてすることは出來ないであらう。』

次に訓練の教育は『最も重要な見聞の組織的涵養』に依つて充分に確保され得るから、後ちに説く『見聞の教育』に包含されてしまふのである。

修養の教育と稱する所のものは、技術的に見聞の教育と關係して來るものであるから、先づ見聞の教育が與へられた後に涵養せらるべきものである。

次に研究の教育なるものは、一度び發見された真理は自然的に擴まつてゆくといふ假定の上に立つてゐる。然るに教育の眞の職能は、後にも述べる如く、既に確立された真理を普及することに在るのであるから、この點に標的の錯誤が見出される。從來研究方面のために、餘りに多くの努力と時間が空費されたことは事

實である。これ蓋し、既に發見されてゐる真理でありながら、一般的に普及しないため其存在を知らない人々があつて、彼等は之を新たに發見せんとするため、二重の努力と時間を費すといふことがあるからである。そこで最後に掲げた見聞の教育といふものが、最も重きを成して來るのである。

『見聞の教育』とは『世界に現存してゐる見聞のうち最も重要と見られ得るものを、萬人の間に押し擴める組織』である。

ウワードは心意の能力を顧慮する所なく、寧ろ心意の内容に一切の注意を向けてゐる。これ蓋し、文明人の理知能力には殆んど程度の差がないといふ、彼れの所信に由來するものであらう。随つて彼れの主張する教育は、知識の詰め込みといふことに過ぎないやうにも見えて來る。ウワードは斯く測斷されることを豫想して曰く、『若し知識の詰め込みといふことが、多量の見聞を得ることを意味するとなれば、それは決して排斥すべきことでない。排斥すべきは寧ろ無意味な名稱を

素讀的に記憶させたり、愚にもつかぬ問題の解決に知囊を絞らせたりすることである』と。

ウ・ードは他の問題についても國家社會主義的の見解をとつてゐるが、教育については殊に私教育なるものを排斥して國家教育を主張することに熱心である。彼れが私教育について與へた批評は辛辣を極めてゐる。彼れは曰く『私教育には落第といふやうな言葉が無い。生徒が試験に落第するといふことは、教師から見れば一つの援助者と、収入の一部を失ふことになる。そこで商業經濟上の法則が此關係を規制する。己れの子女を規定の期間に卒業させようと望む父母は、彼等の能力が優秀であるとの證明を與へ、優等な成績を以つて卒業せしめる方法を見出すことは困難でない。富有的な兩親の子女たちには、特別の眷顧を與へねばならぬことは言ふまでもない。また兩親から、ませて利口者であると見做されてゐる子供には、兩親の評価を満足させるに充分な成績點を與へなければならぬ。多

種多様な教科書を利用することは、親たちが教科書に就いて抱いてゐる見解の多種多様なことに表裏した現象である。需要供給の經濟的原理に基いて與へられる私教育の一般的性質は、實に斯くの如きものである。』

國家教育が私教育に優る所以は色々ある。例へば、兩親の氣まぐれを廢して、社會の利益を嚴密の目的とする如きその一つである。また瘠せこけた薄汚ない貧乏人の子供たちを、肉づきのいい優雅に育てられた上流の子供たちと平等の立場に置くといふ如き長所もある。更らに教育の最高機能たる見聞の普及を確保するといふ如きは、國家教育の特に著しき長所である。

教育は普遍的でなければならぬ。それは或る特殊の階級又は個人の獨占物であつてはならない。教育の普及は『知者に対する無知者の侵害を防ぐと同時に、また無知者に対する知者の侵害をも防ぐものである。』裏にも述べた如く、教育を勞働者にも資本家にも平等にするは寔に望ましいことである。今日では、資本家

は一般に労働者よりも遙かに進んだ教育を與へられてゐる。労働者が語るに足るほどの團結も造らず、殆んど一騎打で己れ自身の利益を守らうとしてゐるとき、資本家は既に極めて發達した協力の手段を利用してゐる。これ蓋し、資本家の教育がヨリ進んでゐる結果である。しかのみならず、資本家は彼等自身の間にも協力を實行してゐるに拘らず、労働者によつて同一のことが爲されるとき、動もすればそれを排斥しようとする。ウワードは此過程を次の如く説明してゐる。

「知者階級は協力し、かくする事によつて資本家となり雇主となつてゐるのであるが、無知者階級は孤立的の状態に置かれてゐて、みづから造り出した價値の大部分をば何等の等價を得ずして資本家の手に渡してしまふことを餘儀なくされてゐた。近世の資本家は諸種の有力な新聞雜誌を利用して、己れ自身のために都合のいい輿論を造り、かくすることによつて他人の労働に對する支配を永久的ならしめることが出来る。労働者は斯かる交通の便宜を殆んど有して居らない。假り

に有してゐるにしたところで、殆んどこれを利用してゐることが出来ない。そこで苟くも文字を読み得る人は、資本家の新聞雜誌のみを読むこととなるのである。彼等は資本家の詭辯を看破することが出来ず、一方に偏した見解のみを聽かされてこれに黙従し、甚だしきはこれを辯護するやうにもなる。資本家の側に於ける斯種の協力は固より協力とは呼ばれて居らず、何等特定の名稱をも與へられて居らないが、實質に於いては協力たることに變りはなく、營業上の唯一の適當確實な方法と見做されて居り、且つ又斯かるものとしての實を示してゐるのである。然るに労働者の側から爲される所の、同一の原理に立つて同一の目的を追求する一切の協力的行動は、社會に對する一種の犯罪として喧しく非難されてゐるのである。」

強制教育については、ウワードは名を捨てて實を取るといふ態度に出でてゐる。兒童は教育について何等知る所がなく、教育の價値を自覺するに至つて居らない。そこで如何なる形式の教育にも強制が必要となつて來る。

ワードは又、教育上男女を均等の立場に置くべきことを主張してゐる。殊に彼等は、教育を以つて勞働階級の必要に應ぜしむべきであると力説してゐる。彼れは曰ふ。

『苟くもその名に値する教育組織を與へんとすれば、先づプロレタリアのためといふ條件に立たなければならぬ。大抵の教育組織は、世間的に認められた流行的の方法で最高級の教養を求める以外には終生なす所もなく暮らしてゐると信じられる富者の子女の爲にのみ案出されたものであるやうに見える。だが多數民衆も亦、教育を要してゐるのである。彼等は消化し得べき最も壓縮された形を採つた眞實の教育を要してゐるのである。彼等の精神的胃腑は堅固であるが、これを以つて消化すべき時間を有して居らないのである。迂餘曲折的教育道程を進むことは彼等の堪え得ざる所である。彼等は一直線に進まなければならぬ。彼等にとつては、一步一步が計算に入るのである。』

ワードは見聞の普及を力説し、見聞の公平な分配を主張した。これは上段に述べたところである。だが現在社會のために斯く見聞の公平な分配を主張した彼等は、富の公平な公配に就いては何等言ふ所がないのであらうか。否彼れに依れば、見聞が平等に分配されるとき、富の分配の不平等は忽ちにして消滅するのである。見聞は主であつて、富は従である。彼れは此見地から社會主義者の反對論を批評して、彼等は家の礎を設けないうで専ら屋上の構造にのみ没頭してゐるものであると言つた。

七、摘 要

最後に以上説くところを、ワードの表式に従つて摘要すると、次の如くなる。

A、幸福。苦痛又は不快に對する慰樂又は快感の超越。

- B、進歩。自然現象を以つて人類の利益に調和させること。
- C、動的行動。理論的、發明的、又は間接的なる努力の應用。
- D、動的見解。宇宙對人類の關係に對する正しき見解。
- E、見聞。環境を知ること。
- F、現存見聞の普及。

以上定義する六つの因子からして、動的社會學についての六つの對應した定理が生じて来る。それは次の如きものである。

- A、幸福は努力の究竟目的である。
- B、進歩は幸福への直接手段である。随つてそれは、努力の第一の直接目的又は究竟目的に對する第一義的の手段となるものである。
- C、動的行動は進歩への直接手段である。随つてそれは、努力の第二の直接目的又は究竟目的に對する第二義的の手段となるものである。

- D、動的見解は動的行動に對する直接の手段となるものであつて、努力の第三の直接目的又は究竟目的に對する第三の直接手段となるものである。
 - E、見聞は動的見解に對する直接の手段となるものであつて、努力の第四の直接目的又は究竟目的に對する第四の直接手段ともなるものである。
 - F、教育は見聞に對する直接の手段となるものであつて、努力の第五の直接目的又は究竟目的に對する第五の發端的手段ともなるものである。
- 最後にワードは、以上の諸定理を次の公式に摘要してゐる。(茲に用ゐられてゐるイークォルの記號は、數學に於ける『等し』の意味でなく『生ずる』又は『結果する』の意味に解すべきである。例へば $B=A$ は『BはAに等し』でなく『BはAを生ず』の意味である)。

A (究竟目的)

$$B = A$$

$O = B = A$

$D = O = B = A$

$E = D = O = B = A$

$F = E = D = O = B = A$

以上に述べたワードの社會過程觀は、近世社會學文獻に於ける重要成績の一つとなつてゐるものであるが、この全學說を通じて一貫した基調となつてゐるものは、『間接方法』と稱するものの研究である。我々は次章に、この間接方法なるものが如何なるものであり、如何にして重要な原理とされるかを説くことにする。

第十二章 社會進歩と間接的方法

一、急がば廻れ

急がば廻れといふ諺がある。二點間の直線が曲線よりも短いことは幾何學上の定則である。そこで目的に對する手段は手つ取り早いに越したことはない。急がば廻れではなく、廻らないで直行しなければならぬ。直進直行は危険なるが如くにして、實は最も有効な方法であるとされる。

この主張には確かに一理ある。然しそれが、如何なる場合にも眞實であるか否かは疑問である。なるほど、目標と主體との間に何等の障礙もなき場合には、直進直行は最も有利である。然し人事は複雑である。坦々たる平路にも思ひがけな

き陥穽あることを豫期しなければならぬ。複雑なる人生に於いて、人の目的が直進直行を許す場合は滅多にないのである。一度蹠いた路傍の石に二度蹠くのは愚なことだ。二度目には石を取り除くか、廻つて避けるか、兎にかく最初の失敗を繰り返さないやうにする。取り除くことも廻つて避けることも、共に不可能であるとするれば、他の路を選ぶほかはない。づれにしても迂回である。直線ではなく曲線である。茲に急がば廻れの哲理がある。この見地から、ウァードの「間接方法論」なるものが推論されて来る。

二、間接方法の發生

自然の盲目的な力や、下級動物の本能や、凡ゆる副次的の人間力と、人類の理性との異なる所は、前者が直接的の行動に依つて作用するに反し、後者が間接的方法に依つて作用するといふ一點にある。間接方法なるものは、理性の發生と

共に現はれて來たものである。その發生は宇宙史上に一新紀元を劃するものであつて、ウァードはこれを生命の發現と等しき價值のものに見てゐる。これに反して、直接方法は人間以外の凡ゆる動物に共通した方法であつて、非合理的又は非理性的なる行動と呼ばれ得る。未開人種の行動はみなこの方法に依つたものである。理性が發生して活動を開始したとき、直接方法は廢されて間接方法がこれに代はる。

如何なる社會的進歩も、理性の作用に基礎を置くものである。理性は發明を與へ、發明は進歩を與へる。而して如何なる發明者も、間接の方法に依り側面運動に依つて、目的とする所に近づいてゆくのである。野蠻人が物體を動かす方法は下級動物のなす所と異ならない。後者が口で物をくわへて動かすやうに、前者は手に掴んで動かすのである。いづれにしても、能力の限界は筋肉の力に依つて定められてゐる。然るに巨岩を動かすといふやうな場合になると、斯様な直接的の

方法では役をなさず、茲に戦術が必要になつて来る。如何なる戦術も本質上理性的のものである。野蠻人は直接的に目的を達成しようとする。戦術者は理性の作用を介して目的に對する手段を發明しようとする。間接的方法の特徴は、間接的手段を通して目的を達成するといふ點にある。理性は手段を選択して目的の實現に着手する。理性の發動少なき野蠻人にとつては、手段選擇は目的の實現に對して無益の努力である如く見える。

上述の巨岩を動かすといふ場合について言へば、理知的方法は先づ槓杆を造り、次いで起重機を發明する。それは迂遠な方法であり、徒勞に屬する如く見えるが、事實に於いては唯一の有効な方法となるのである。野蠻人が最初、魚を食物として利用し得ることを見出した時、彼等の漁撈方法となつたものは、直接的方法であつた。即ち彼等は腕を直接水中に挿し込んで魚を掴み捕らうとした。けれどもこれでは無効に終ることを見出した。而も空腹はますます追つて来る。

そこで種々考察した結果、彼等の理性は遂に目的に對する適當な手段であるところの魚網を發明させたのである。魚網なるものは一つの發明品であつて、有效なる間接的戦術の結晶として與へられたものである。

野草を以つてしては増殖した人口の需要に應じ得なくなつたとき、理性の作用が要求され、作戦が必要となつて、茲に農業が發明された。斯かる場合に、つねに救助の源泉となるものは理性である。而して理性の與へる救助方法は如何なる場合にも常に同一であつて、直接目的の達成に着手する代りに、先づ其手段たるべき道程を發明せんとするのである。野蠻人がただ筋肉の力のみによつて敵に對抗してゐた限り、彼等はしばしば己れよりも小さな動物にさへ敗けてゐた。況やヨリ大なる動物に對しては、如何ともすることが出来なかつたのである。然るに理性の發達は、目的に對する手段を考案せしめた。斯くして彼等は遂に弓矢や、斧や、鉞などに依つて、如何なる強敵にも對抗し得ることとなつたのである。

三、自然と技術

直接方法と間接方法との差は自然と技術との差である。それはワードの言ふ如く、あてもなく大洋の真中を漂ふ氷山と、港から港へ進路を辿つてゆく汽船との差の如きものである。又は様々に曲り紆つた道を流れてゆく小川と、目的點に向つて直線的に進行する運河との差の如きものである。河川は知識のない所にも理知的方法のない所にも存在し得る。然し運河は常に目的への手段として造られる。それは常に定まつた意圖を表現して居り、常に理性の産物として與へられるものである。

直接的の行動にしる、間接的の行動にしる、如何なる行動も常に目的達成上の手段となされる。而して常に靜的であつて進歩に貢獻する所のない直接的の行動と、常に動的であり進歩的である所の間接的行動との差は、前者に在つては

行動と目的との間に何物も介在せざるに反し、後者に在つては、理性によつて、行動と目的との間に手段と呼ばれる第三の要素が挿入されるといふ一點に存してゐる。

直接的の行動は自然に對する最初に與へられた方法であり、且つ最下級の野蠻人によつて應用された方法であるといふ意味から、ワードは之れを物理的(自然的)の方法と呼び、反對に間接的の行動を理性的の方法と呼んでゐる。彼れは曰く『欲望を與へられた生物が欲望充足の對象の存在を知る時、彼れは直接この對象に向つて運動を開始し、努力を傾倒する。斯かる生物から見れば、同一の對象を欲求しながらも、先づ眼を轉じて周圍に横はる諸種の對象間に整理を與へ始める如き他の一生物は、お伽噺の言葉を以つて言へば途方もない間抜けなことをしてゐるやうに見えるであらう。それは不自然な行動であり、人爲的な行動である。が若し、直接的の行動によつて達成せられない目的が、斯かる行動に依つて

のみ達成せられるといふ以上、これを眞の技術として、科學的方法として推奨するに何の不思議があらう！』

ウァードは又曰く『現存の交通組織を可能ならしめた諸種の偉大なる傳系的技術や、社會の物質的狀態を完成せしめた様々の實用的な發明的技術は、いづれも直接的努力の手の届かない所にある遠き對象として現はれた此等の大目的をば、間接的に確保すべき手段を理性的に認識した結果として與へられたものである。此等の目的はいづれも、それ自身とは似もつかない間接的の手段によつて成就されたものである』と。

四、間接方法と教育

以上説く如く、社會進歩の過程は教育に始まつて幸福に終はり、その間數個の段階を通過しなければならぬのであるが、これに就いては、次の如き反對論が

提出されるかも知れない。即ち斯かる進歩過程の發端に於いて教育のために費された努力は、諸種の間段階を経てゐるうちに、最後の標的に到着するに先だち、其力の大部分を喪失してしまふであらうといふのである。ウァード自身も言つてゐる如く、『教育が危ぶまれ、その作用が疑はれるやうになつた主要の理由は教育が所期の目的から極めて遠隔した一手段となり、人類の知識は辛うじて兩者を結合する所の因果的關係を認識し得るに過ぎない状態となつたことにある。』然るに彼れは又、この目的と手段との遠隔こそ、却つて教育の効力を大ならしむる所以であり、教育のために主力を傾けることを必要ならしめる所以であるとす。若し最後の標的から遠隔してゐる故に教育の効力を疑ふといふならば、槓杆の重みを戴せる方の一端が遠く隔つてゐればある程、槓杆の効力は益々減退しなければならぬ筈であるが、事實は寧ろ反對である。力の倍加は中間段階によつて生ぜしめられるのである。槓杆に於ける如く、社會進歩の過程に於いても、究

竟標的たる幸福の増進を得んとする努力は、標的から遠隔された所に主力を注げば注ぐ程、益々有効となつて來るのである。

反對に直接幸福を掴まんとする努力は無効に終はる。ウ・ワードは曰く「直接に幸福を得んとする努力は、個人の場合に在つても功を奏しないことが多い」と。直接の努力を以つて人の見解を變へさせる事の不可能なるは、歴史の示す所である。何等かの手段を用ひなければならぬ。而して其手段となるものは、變へさせようとする見解の誤りを示す論證の形を採らなければならぬ。數學や、化学や、生物學などに依つて用ひられてゐる方法は即ち間接的方法であることを示すために、ウ・ワードは數頁を費してゐる。この原則は單純のやうに見えて、而も極めて重要なものであることは、彼れがこれを「動的社會學の隅の親石」と呼んでゐる所に見ても明かである。從來、社會狀態の融和を目的とした立法が、いづれも型の如く失敗に歸した所以は、間接的の道程を無視して直接標的に達しよう

とした點に求められる。スペンサーは社會改良の立法的努力を辛辣に批評した。彼れの批評の基礎的見解となつたものは、法令などの指導を受くべく社會は餘りに複雑だといふ見解にある。彼れは當時の禁酒立法を批評するに當り、社會的害悪は多數決の法制を以つて直接これを襲つても到底救治され得るものでないことを示すために、一つの興味ある例解を與へた。

この鐵板は完全に扁平でなく、左の方が少しく反れ出してゐる。如何にすれば、これを扁平になし得るか。言ふまでもなく反れた部分を叩きつけばいい。そこで私は槌を以つて其部分を打ちつけた。私は更らに力をこめて幾回か叩きつけて見たが、一向にきき目が無い。のみならず、却つて反對の部分が反れ返つて來た。最初の反れが治らない上に、いま一つの反れが現はれて來たのである。若し専門技術者があつたならば、私のしたやうに反れた部分のみを叩かないで、鐵板のあちこち萬遍なく、調子を變へ、向きを變へて、或は激しく或は穩かに叩き

ならしたであらう。要するに、直接的の動作ではなく、間接的の動作を以つてしなければ、物事の改善は行ひ得ないのである。これは諸君の考へるほど單純な方法ではない。一枚の鐵板でさへ斯くの如しとすれば、社會の改善が如何に困難であるかは推知され得るではないか。人類は鐵板よりも伸し易いものではないから。

五、禁酒運動と社會主義運動

禁酒運動なるものは直接行動の無効を證明する所の適例である。飲酒の善し惡しといふ問題よりも、飲酒の事實が存在してゐることから出發しなければならぬ。禁酒運動者は直接目的を達成しようとする。彼等は直ちに飯酒を止めさせようとする。而して人類が何故酒を飲むやうになつたのか、飲酒に對する境遇上、生理上その他の原因については、何等問はうとしないのである。若しこれを問題

としたら、彼等は徒らに禁酒を進めることをしないで、寧ろ社會上、經濟上の境遇改善や、家庭生活の向上や、高尚なる趣味の鼓吹などに、全力を傾倒したであらう。けれども斯かることは、禁酒運動者の理知能力には餘りに間接的に過ぎ、餘りに理性的に過ぎるものと見られるのである。

これについて聯想されることは、近來直接行動といふ言葉が社會主義運動者や労働運動者の間に用ゐられるやうになつた。謂ふところの直接行動とは社會主義戰術の一つであつて、政治的過程の緩慢なる作用を待たず、直接労働者の組合に生産機關を掌握させようとするのである。斯くの如きものが、果して有效なる戰術といひ得るであらうか。直接行動は一つの戰術といはれてゐるが、現實に於いて戰術たる資格を全く缺いてゐる。労働者は生産機關を要求する。これは直接行動派たらざる社會主義者も、等しく承認する所である。然るに直接行動論者は、この點から出發して、それ故労働者は生産機關を奪取せよと主張する。斯かる方

法は理知的とはいひ得ない。生産機關の獲得は目的である。然しこの目的を達成するには、間接的の手段に依ることが最も有効である。そもく經濟上の權力は、政治上の權力と合體して防衛されてゐるのであるから、生産機關を獲得しようとする労働者は先づ政權を獲得しなければならぬ。政權の獲得は迂遠なるが如くにして、實は最終目的を達成すべき最も有効な手段となつてゐるのである。

この社會主義戰術はマルクスに依つて提唱された所であるが、我々は最近に於ける社會學の發達を見るにつけ、今更らの如くマルクスの偉大なる科學的眼識に打たれざるを得ない。彼れは社會を以つて一つの過程であるとした。彼れはウァーグと同様に、社會過程及び社會組織の改造を目的とする一切の社會的行動は、現實的に作用してゐる社會力の客觀的分析から出發しなければならぬと信じてゐた。彼れは社會過程を分析して、一切の革命が根本に於いて經濟的であること、然し革命の目的は直接行動によつては確保され得るものでなく、ただ目的に對す

る手段に依つてのみ確保されること、而して唯一の有効手段は政治的であること、随つてプロレタリア的革命は歴史上に於ける他の一切の革命と同じく目的に於いては經濟的であるが、手段に於いては政治的革命でなければならぬことを明かに見た。これらの知識的功績から評價すれば、彼れは世界史上最大なる社會哲學者の部類に屬すべきものである。スモールが彼れを社會科學のガリレオと呼んだことは、まことに適評といはねばならない。

第十三章 社會學の目的

一、社會學者の慧眼

社會學者は經濟學者に比べると、社會問題の重要なる所以をヨリ鋭く擱んだ點に於いて優つてゐる。社會問題は根本に於いて貧富の問題である。社會が二つの主要階級に區分されて、一方には富が有り餘り、他方には貧が有り餘つてゐるといふこと、而して此兩者の間に明瞭な因果關係があるといふこと、ここに社會問題の出發點が求められなければならない。

今日の文明社會が斯かる貧富對立の極端な状態のもとにあることは、詩人も、自然科學者も、經濟學者も、みな等しく認めてゐる所である。少なくとも彼等の

中に在つて、ヨリ慧眼なる人々は、みな明かにこれを認めてゐる。而も彼等の認識は、社會學者に於ける如く一般的でなく、また深刻でもないのである。

ベンジャミン・キッドは社會主義に反對した學者ではあるが、その著『社會進化論』の中に次の如く述べてゐる。「新しい信仰の奉持者は問ふ。——多くの人々が尙ほ働いて窮乏し、極めて僅かな人々が閑暇を有して富んでゆくのであるならば、地球上の荒廢せる場所が商業の公道に變へられたからとて、それが何になる？ 科學のすべての應用が勞働者の勞働を輕減するのでないならば、知識が増進したからとて、それが勞働者にとつて何の益になる？ 富は蓄積されるかも知れない。公私兩面の壯麗は世界史上未だその比を見ざるまでに發達したかも知れない。然し貧の仇神が尙ほ、目の落ち窪んだ怪物然として宴席に臨んでゐるのであるとすれば、社會はそも／＼如何なる點に於いてヨリ善くなつてゐるのであるか？」と。

二、應用社會學と純理社會學

レスター・ウォードの偉大なる所以は、必ずしも彼れの偉大なる綜合分析にのみ存するものではなく、勞働階級の狀態に對する深刻鋭利なる認識の中にも存してゐるのである。この點に於いて、經濟學者の間に彼れと肩を並べ得るものは一人もない。社會學者の中にも餘りないと言へやう。若し現在の社會狀態が救治され得ないとするれば、寧ろ彗星でも落ちかかつて來て、一切の幻影を掃蕩された方がよいと思はせるほど、今の社會狀態が不良の極にあることを信ずる點に於いて、ウォードはハックスレーと見解を等しくしてゐる。社會學に對するウォードの最大貢獻は寧ろ「應用社會學」の方面に認められるのであるが、斯く言ふことは決して彼れの名著「純正社會學」の價値を貶さんとするものではない。「純正社會學」と「應用社會學」との異なる所は、純正機械工學と應用機械工學の區別に似てゐる。

それは要するし、理論と實際との差異である。

「純正社會學」は社會過程の法則の探求を目的とし、「應用社會學」は社會過程を人間改善に適した形に改變すべき社會的技術を探求せんとするものである。應用機械工學が純正機械工學から得た知識を基礎とする如く、「應用社會學」は「純正社會學」から得た知識の上に打ち立てられねばならぬものである。これについてウォードは曰ふ。

「純正社會學は社會の實際狀態に對する一つの科學的研究に過ぎない。これに依つて、眞の自覺が與へられ得るのである。純正社會學は社會學上の諸事實、諸原因及び諸原理を供給することに依つて、「何が」、「何故」また「如何にして」等の諸問題に答へる。それは自己定向の一手段となるものである。我々は己れ自身の何ものたるかを知り、また如何なる力に依つて我々が現在の形態及び性質に造り上げられたか、自然の如何なる原理に従つて、創造的轉形的な諸種の過程が作用

してゐたかを知るとき、眞に自分自身を理解し始めたことになるのである。存在してゐる一切事物の上に、凡ゆる非難を防ぐ如き慈悲の外套が投げ懸けられてゐるばかりでなく、また一切の點に於いて世人の希望する状態に置かれて居らない諸種の事物が、如何なる程度まで、また、如何にして、所期の状態と調和せしめられ得るか——この問題について、今や一つの合理的基礎が供給されてゐる。我々は此方法に依つて、人類行動を通して變更され得る社會事情と、到底變更し難き、人力の及ばない所にある社會事情との間に、區別を立てることが出来る。この區別なきため浪費されることを避けられない莫大の精力は、斯くして節約され、以つて實行可能な方面に集中され得ることとなるのである。」

「これらは何づれも、改善の全方法に於ける完全な一變化を意味するものである。従來改善の觀念には、光の觀念よりも寧ろ熱の觀念が常に結びつけられてゐた。各種の改善は社會的スペクトラムの末端から發射するものであつて、スペク

トラムの熱線の産物であり光線の産物ではないと考へられてゐた。然し激情や罵倒を以つてしては、何等の効果も與へられない。非科學的方法是主張を特徴とし、科學的方法是研究を特徴としてゐる。改善の願望は如何に熱切であつても、これを充足せしめるものは冷靜な研究の外にない。而して最も温き感情の實現は、最も冷たき論理を通してのみ可能となるのである。如何なる物にも善良な分子が含まれてゐるか、又は含まれてゐた。惡のみの制度といふものはない。多くの人々に依つて廢除を希望されてゐる制度(例へば奴隸制度の如き)は、また他の人々に依つて擁護されてゐる。然し斯種の制度の擁護者も攻撃者も、大抵はその歴史やそれらを生ぜしめるに至つた原因を閑却してゐる。主張的方法是「正」と「反」とを取り扱ひ、科學的方法是「合」を取扱ふ。ただ此「合」によつてのみ、「正」及「反」に共通した眞理に到達することができ、ただ此方法に依つてのみ、社會事情の改善を目的とする有効な行動の合理的基礎を與へ得るのみである。」

三、ウオードとスペンサー

ウオードは自由放任主義に極力反對した。この點に於いて彼れはスペンサーと著しき對照をなし、コントと同一の立場に置かれてゐる。彼れはスペンサーのマシチェスター的個人主義と社會有機體との對立を看破した。スペンサーの社會有機體には錯誤がある。社會は生物學上の有機體とは著しく異なつてゐる。後者にあつては、感覺中樞は身體の他の部分を構成する個々の細胞から離れた別個の器官に集中されてゐるが、社會には斯かる中樞に相當すべき何等の器官もない。而して社會意識とは畢竟するところ、個々人の意識の合成に外ならないものである。そこで生物學的有機體に在つては、感覺中樞は全體の利益の爲に部分の利益を犠牲にするが、社會的有機體に在つては部分の意識をして全體と部分の利益の爲に行動せしめるやうに強制してゆかなければならない。

ウオードは斯かる立場をとつてゐたが、然しスペンサーの如く立法的の行動を否定しようとはしなかつた。立法的行動に從來幾多の過誤があつたとしても、それは立法それ自身が悪いからではなく、個々の企圖が不十分な材料を以つて基礎づけられ、且つ應用科學の基礎たるべき適當なる純正科學を缺いてゐた結果である。諸種の社會力が充分に理解され、その理解が社會の成員間に充分普及したとすれば、その場合には恰も過去に於いて科學者や發明者が宇宙の物理力に間接的方法を應用して近世文明を造り出した如く、將來の立法者は人類進歩のため間接的方法を社會に應用し得ることとなるであらう。教授スマートルは、この點にもウオードの功績を認めてゐる。彼れはその著『一般的社會學』の中で、社會學界に於けるウオードの意義を大體次の如く評價してゐる。

『社會學界に於けるウオードの出現の本來的意義は、進歩のために大膽なる宣戦がなされたといふことである。彼れは曰く、進歩のプログラムに従つて社會を指

導すべき生活行爲上の條件を充分に知ることは不可能でない。今や我々は社會進歩への應用を目的として、見聞や研究を組織立て得るのであつて、見聞の最善な援助なく、ただ過去に行はれた事實を分析し記述することだけでは、もはや満足しない。我々は人間進歩の諸因子を熟知しなければならぬ。而してこれを熟知し得るやうになつた時、我々は全力を以つて人類改善への利用に着手し得るのである。』

四、人類改造の使命

若し社會が人類改善の使命を有しないとすれば、我々は社會を研究する必要はない。この點について、ワードは卓抜なる見解を發露してゐる。彼れは曰く、『若し社會學に此使命がなかつたとすれば、私はこれについて何等の興味をも感じなかつたであらう。純正社會學は人類に自己定向の手段を與へる。それに依つて

我々は、人類が如何なるものであり、また如何にして今あるが如きものになつたかを教へられる。この知識から出發して、人類は自己の將來を考へることが出来る。文明的の造詣が如何なる要素に依つて構成されるかを明瞭に理解したとき、人類は改善の構成要素を知り得るやうになる。應用社會の目的は、文明的造詣を以つて改善と調和させることにある。若し文明を構成する一切の造詣が、人類の状態に何等の改善をも造り出すことなくして成就されたとすれば、これが原因を穿鑿することは、即ち應用社會學の使命である。應用社會學の主なる目的の中には、かかる穿鑿も含まれてゐる。造詣が社會化されなかつたといふ點に原因が存してゐる。そこで造詣の社會化といふことが問題となつて來るのである。』

『人類を平等化さうする如何なる計劃も成功し得るものでない。而して諸種の不平等を生ぜしめる決定力となつたのは最初は腕力であつたが、それは遂に才能の力に取つて代はられ、後ち更らに知識が社會に於ける個人の位置を決定するや

になつたと信じられてゐる。而して今日最もよく開化された人種及び自然的地層に於いて、何故或る者はヨリ低き位置を占め、或る者は又ヨリ高き位置を占むるに至つたか、それを決定するものは即ち此知識の差であると主張されてゐる。これ即ち眞の自然的状態であつて、當然なるべきやうになつてゐるのだとも主張されてゐる。更らに、これは自然的であるから到底變更し得ないものだとも主張されてゐる。これら一切の主張は、些々たる分析を以つてしても打破せられてしまふ。例へば文明的造詣の立場から出發して、當然次のやうにも主張し得るであらう。即ち卓絶した才能によつて文明の基礎たる諸種の大功績を成就した人々から自然的の報酬を奪ひとつて、これを何等の造詣をも成就しなかつた劣等な人々の間に分配することは不公平であると。しかも事實に於いては、これが行はれてゐたのであつて、世界の全歴史は、文明的造詣を興へた人々が何等の報酬をも受けなかつたことを證明するものである。彼等の受くべき報酬は、何等の造詣をも興

へなかつた人々の有に歸してゐる。これらの人々は大抵みな、複雑にして組織の不良なる社會の下に與へられる偶然的の位置によつて、他人の造詣の結果を利得するのである。けれども此等の果實のすべてが、それを可能ならしめた人々の有に歸すべきであることは、何人も主張しない所であらう。造詣の果實は量に於いて無限であり、且つ無窮に持續するものである。彼等は不當の分け前を要求する如きことはなく、總べての人類と總べての時代との爲に活動する。而して彼等の要求する一切は、彼等の事業が萬人に對して永久に裨益するところあらんことである。』

以上の主張は、マルクスの説く所と本質に於いて一致する。一八一二年二月、ウオードが紐育に催されたトマス・ペインの記念祭に與へた演説の一節は更らに此一致を明かにしたものである。

『經濟的闘争と密接に關連したいま一つの闘争がある。それは現代に於ける極

めて重要な闘争であつて、社會的闘争と呼ぶべきものである。政治的闘争の渦中にあつた人類は、彼等の政治的権利が確立された曉には黄金時代が來たるであらうと想像してゐた。然るに事實は、其種の何ものをも與へなかつた。しかのみならず、更らに新たなる大闘争——經濟的の社會的闘争を通過しなければならぬ事を見出したのである。政治的の闘争は、第一及び第二階級を顛覆しつつあつた當時に於ける新興第三階級にのみ限られてゐた。今日の闘争は、社會的及び經濟的平等の獲得に向けられてゐる。これ通常プロレタリアと呼ばれる第四階級なるものの社會的解放を目的とした闘争である。』

社會主義社會學終

昭和二年一月二十日改訂版印刷
昭和二年三月十日改訂五版發行



社會主義社會學
定價金 壹圓

著者 高 島 素 之

發行者 山 本 美

東京市麹町區內幸町一丁目三番地

印刷者 久 保 民 生

東京市芝區南久保町一丁目一番地

發 兌

東京市麹町區內幸町一丁目三番地

改 造 社

總發行所 東京市八丁
電話 銀座 五〇五七
電話 銀座 四八三二

改 訂 資 本 論 解 説

内 容 目 次

四 六 列 並 製
定 價 壹 圓
送 料 十 六 錢

第一篇 商品、貨幣、資本

第一章 商品 (一)商品生産の性質 一、資本論の目的 二、生産物と商品 三、商品研究の必要 四、生産關係と社會 五、アメリカ印度人の狩獵方法 六、交換に依らざる分配 七、印度の村落共產制 八、村落共產制の分業 九、父家長支配の農民家族 十、商品出現の經過 十一、商品生産の社會的性質 十二、共產的生產と商品生産との差異 十三、商品の電術的性質 (二)價值 一、商品と使用價值 二、交換價值と價值 三、價值の本質 四、價值の大小 五、社會的勞働 六、勞働の二重性 七、小ブルジョアの社會主義的誤謬 八、價值と富 九、生産と自然との關係 十、勞働の價值形成力と勞働力の價值 十一、法則的性質 十二、價值と價格 (三)交換價值 一、價值量と價值形態 二、使用價值と價值との對立 三、方程式の轉換 四、價值形態の史的發展 五、一般的價值形態の特徴 (四)商品の交換 一、商品交換の初期 二、交換發達の第二期 三、交換發達の第三期 四、貨幣の出現

第二章 貨幣 (一)價格 一、價值尺度としての貨幣 二、價格標準としての貨幣 三、價值尺度と價格標準との差異 四、交換の媒介物 (二)賣買 一、二重の轉化 二、商品の流通 三、物々交換と商品流通 (三)貨幣の流通 一、循環と流通 二、商品流通に要する貨幣量 三、貨幣流通の速度 (四)鑄貨、紙幣 一、鑄貨の出現 二、補助貨幣 三、貨幣の機能 (五)貨幣の其他の機能 一、異貨貨幣としての貨幣 二、支拂要具としての貨幣 三、信用要具としての貨幣 四、金融恐慌の可能 五、世界貨幣

第三章 貨幣の資本化

(一)資本とは何ぞや 一、賣る爲に買ふ 二、無限運動の原動力 三、餘剩價值と資本 四、資本に関する俗見 五、資本は歴史的產物 (二)餘剩價值の源泉 一、餘剩價值は流通行程より生ぜず 二、商業資本と高利貸付資本 三、餘剩價值の板挟み (三)商品としての勞働力 一、一種特別の商品 二、勞働力を商品たらしむる條件 三、勞働力の價值 四、賃銀前拂論の迂愚

第二篇 餘 剩 價 値

第一章 生産行程 一、勞働行程の要素 二、商品生産の勞働行程 三、資本制商品生産の勞働行程 四、勞働行程と價值増殖行程

第二章 價值生産に於ける資本の作用 一、價值造出と價值移轉 二、勞働の二重性と生産力の増減 三、生産機關に現はれる勞働の二重性 四、不變資本と可變資本

第三章 勞働力の搾取程度 一、可變資本と價值形成 二、餘剩價值率 三、資本主義學者の欺瞞的論法 四、最終勞働時間説の迂愚

第四章 餘剩價值と利潤 一、餘剩價值率と利潤率 二、資本の組成 三、資本の組成率が利潤率に及ぼす影響 四、資本の自由競争 五、平均利潤率の成立 六、生産價格 七、所謂マルクス變説論の背理 八、見當違ひの價值説 九、使用價值と價值とを混同する説 十、價值と價格とを混同する説 十一、資本家の價值論 十二、勞働價值説の價值 十三、利潤論は枝葉問題

第五章 勞働日 一、勞働の正義と資本の正義 二、資本家の欺瞞 三、標準勞働日 四、マルクスの功績 五、勞働の無制限搾取時代 六、勞働者保護の時代 七、瑞西の工場法 八、佛蘭西の工場法 九、獨逸の工場法 十、米國の工場法 十一、國際的勞働者保護の傾向

第六章 「小親方」の剩餘價值と資本家の剩餘價值 一、餘剩價值率と剩餘價值量 二、中世手工業組合員の剩餘價值 三、資本家たる條件 四、死せる機械生ける人間を支配す

第七章 相對的剩餘價值 一、相對的剩餘價值と絶對的剩餘價值 二、勞働生産力の増進と相對的剩餘價值

第八章 協業 一、資本制度の出発點 二、資本制度の勞働平均化 三、多數者使用の利益 四、協業の意義

五、資本家の「勞力」 六、資本の「生産力」 七、原始共産制とギルド制と資本制

第九章 分業と工場的手工業 (一)工場的手工業の二重起原。並びに其の要素たる部分勞働者及び彼れの道具

一、閉却せられたる資本論部分 二、工場的手工業の二重起原 三、工場的手工業と手工業との異同 (二)工

場的手工業に於ける基本的二形態 一、時計製造の例 二、ヒン製造の例 三、工場的手工業の制限 四、勞

働力の等級制 五、相對的剩餘價值の増大

第十章 機械及び大工業 (一)機械の發達 一、工場的手工業の滅亡 二、機械とは何ぞや 三、機械の三要素

四、機械の自動的組織 五、機械を造る機械 (二)生産物への機械の價值移轉 一、機械と生産物との關係

二、機械使用の制限 (三)機械的經營が勞働者に及ぼす直接の影響 一、勞働搾取の増進 二、勞働者の「無

慈悲」 三、幼兒死亡率の増進 四、知能の萎縮 五、機械の年齢 六、機械使用の矛盾 七、勞働日の延長

八、勞働能率の増進 九、勞働能率増進の二方法 (四)勞働者の「教育者」としての機械 一、機械の主體から

機械の客體へ 二、機械工業に於ける分業 三、工場の刑法 四、機械に對する勞働者の反抗 (五)機械及び

勞働市場 一、機械の使用と不變資本の増大 二、マルクス説を曲解す 三、マルクスは被働勞働者の絶對的

増大を否認せず 四、機械が勞働者を増加せる場合 五、絶對的増大も絶對ならず 六、過度勞働と失業 (六)

革命的要素としての機械 一、小工業の運命 二、農業上に及ぼす機械の影響 三、新社會の胚種 四、教育

革命 五、舊家族の解體、新家族の萌芽 六、新社會の曙光

第三篇 勞銀及び資本收入

第一章 勞銀 (一)勞銀力の價格と剩餘價值との分量變化 一、分量變化の三要件 二、勞働の生産力が變化す

る場合 三、勞働能率が變化する場合 四、勞働日が變化する場合 五、資本制度撤廢後の勞働日 (二)勞働

力の價格の勞銀化 一、勞働と勞働力 二、マルクスの創意 (三)時間賃銀 一、勞働と價值の單位 二、勞

働時間と賃銀 三、勞働日の延長と賃銀 四、時間計算の不條理 (四)請負賃銀 一、請負賃銀は時間賃銀の

變形 二、請負賃銀と資本家の利益 三、請負賃銀は勞働者に不利 (五)勞銀の國民的差異 一、絶對的賃

銀と相對的賃銀 二、賃銀の高い國と低い國

第二章 資本收入 一、剩餘價值の冒險 二、單純なる再生産と資本の蓄積

第三章 單純なる再生産 一、賃銀は勞働者の造つたもの 二、資本制再生産方法の條件 三、勞働者階級の再

生産 四、勞働者の飲み食ひ

第四章 剩餘價值の資本化 (一)剩餘價值は如何にして資本となるか 一、資本蓄積の第一條件 二、商品交換

の法則の自殺 (二)資本家の節慾 一、資本家の心に住む二つの靈 二、剩餘價值消費の限界 三、剩餘價值

蓄積の限界 四、資本の道德的辯護 (四)蓄積の範圍に影響を及ぼす勞働者の節慾及其他事情 一、勞働者の

節慾 二、勞働時間の延長 三、科學の利用 四、資本の伸縮性

第五章 過剩人口 (一)「賃銀の鐵則」 一、マルサス説 二、資本の組成 三、蓄積と勞銀との關係 四、資本

主義經濟學の地球中心説 (二)産業上の豫備軍 一、生産力の増進と資本組成の變化 二、勞働生産力と資本

蓄積との相互關係 三、資本集中と可變資本 四、マルサス説の正體 五、勞働者人口の絶對的減少 六、蓄

積の増進と勞働日の延長 七、勞働階級再生産期間の短縮 八、田舎より都會へ 九、産業上の恐慌 十、資

本の伸縮と人口の増殖

第六章 資本制生産方法の曙光 一、本來的蓄積のお伽噺 二、近世史の忘れられたる一面 三、土地私有化の

完成 四、プロレタリアの出現 五、大地主は資本制度の先驅者 六、熟練勞働者の不足 七、最初の資本

第七章 資本制生産方法の終末 一、單純なる商品生産と資本制商品生産 二、資本生産方法の矛盾 三、矛盾

の解決 四、必然の國より自由の國へ

福田徳三著	社會運動と勞銀制度	二五〇	山川均譯	無産階級の哲學	二五〇
小泉信三著	改訂 價值論と社會主義	三八〇	賀川豊彦著	生存競争の哲學	二五〇
孫田秀春著	勞働法總論	二六〇	高田保馬著	階級及第三史觀	二八〇
富士辰馬譯	勞働政黨と勞働組合	一九〇	森戸辰男著	思想と闘争	二〇〇
茂森唯士譯	レーニズム	一六〇	平野義太郎著	法律における階級闘争	二五〇
本庄榮治郎著	日本社會史	二五〇	河田嗣郎著	農政四十三講	二五〇
河田嗣郎著	農村問題と對策	二〇〇	堀江歸一著	國際經濟總論	二六〇
河田太一著	農業問題研究	二二〇	堀江歸一著	改訂 國際經濟と國民經濟	二六〇
末弘嚴太郎著	農村法律問題	二二〇	堀江歸一著	續 國際經濟と國民經濟	二二〇
末弘嚴太郎著	職の効用	二六〇	堀江歸一著	貨幣・銀行・外國爲替(上卷)	三〇〇
末弘嚴太郎著	法窓閑話	二二〇	堀江歸一著	貨幣・銀行・外國爲替(下卷)	三〇〇
龜井貞一郎譯	民衆の苦悶	一三〇	小野武夫著	農村研究講話	一八〇
森戸辰男著	青年學徒に訴ふ	二二〇	マシヤル著	經濟學原理(分冊一)序論・若干基本概念・欲求とその満足	三三〇
森戸辰男著	學生と政治	二二〇	マシヤル著	經濟學原理(分冊二)生産要素	三〇〇
ウインターマン著	哲學思想の史的考察	二二〇	マシヤル著	經濟學原理(分冊三)需要・供給・價值の一般關係	三〇〇

マシヤル著	經濟學原理(分冊四)大塚金之助譯	三七八	清原貞雄著	日本道徳論	四〇〇
本庄榮治郎著	近世農村問題史論	二二〇	長田新著	現代教育哲學の根本問題	二〇〇
野村兼太郎著	近世商業史	三〇〇	佐藤繁彦著	體験宗教の研究	二〇〇
山口正太郎著	中世寺院法と經濟思想	一五〇	スライナル著	自我經濟	二八〇
富士辰馬譯	世界經濟論	二二〇	茂森唯士譯	文學と革命	二〇〇
持地六三郎著	日本植民地經濟論	二二〇	昇曙夢著	露國現代の思潮及文學	四〇〇
大山都夫著	現代日本の政治過程	二二〇	細井和喜藏著	工場	二〇〇
森莊三郎著	法制講話	二二〇	細井和喜藏著	奴隸	二二〇
阪内務事官著	増補 普通選舉法要綱	二八〇	末弘嚴太郎著	勞働法の研究	二二〇
松本亦太郎著	心理學講話	四三〇	末川博著	ソウイネトロシアの民法と勞働法	二二〇
松本亦太郎著	智能心理學	九三〇	河田嗣郎著	社會問題綱要	二二〇
桑田芳藏著	ヴントの民族心理學	三三〇	小野武夫著	日本農民史語彙	二二〇
勝部謙造著	改訂 デイルタイの哲學	二〇〇	口田康信著	國家思想の研究	二〇〇
植田壽藏著	藝術哲學	二七〇	廣濱嘉雄著	私法學序説	三〇〇

社會主義と進化論

四六冊並
定價十元

内容目次

- 第一講 進化説と社會進化—ダーキン説とデ・フリー説(一)生物進化の原因(二)淘汰は節(三)ダーキンを誤るダーキン學徒(四)漸變説と突變説(五)月見草に得た暗示(六)新ラマルク説の打撃(七)生物學と地質學者の衝突(八)時代の犠牲者ラマルク(九)佛國革命の代辯者キユヰイーエ(十)商工階級のダーキンと勞働階級のデ・フリー
- 第二講 遺傳説の兩派—ラマルク説とワイズマン説(一)はしがき(二)ラマルク派の遺傳説(三)死ぬ生物と死なぬ生物(四)遺傳を掌る細胞(五)兩派の睡み合ひ(六)「習得性」の遺傳有無(七)足の小指と駱駝の臍肉(八)尾の無い猫(九)ワイズマン勝つ(十)ワイズマン説と社會問題
- 第三講 競争と協同—クモボトキンの相互扶助論(一)進化論史上の五人(二)「自然の状態」(三)ダーキンとクロボトキン(四)動物界の相互扶助(五)新種の發生(六)野蠻人の相互扶助(七)未開人の相互扶助(八)近世に於ける相互扶助
- 第四講 進化と蕃殖—マルサス人口論と收穫遞減の法則(一)暑中の綿入れ(二)マルサス説の根本(三)生殖と蕃殖(四)人間の食物範圍(五)收穫遞減か收穫激増か(六)收穫激増の法則(七)人口論の社會的背景
- 第五講 生物學と社會主義—ヘツケルの社會主義論批判(一)知識ひの議論に基く紛争(二)ダーキン説と社會主義(三)ヘツケルの主張(四)ヘツケルの自認自縛(五)悪平等のブルジョアの起原(六)蜜蜂の階級(七)自然界の競争と人間社會の競争(八)法則の認識と社會の進歩

- 第六講 宗教と社會—キツドの社會進化論(一)社會學の後れてゐる理由(二)競争と漸變(三)淘汰と社會進化(四)理性の否定(五)キツドの貧困觀(六)キツドの社會主義觀(七)キツドの歴史觀(八)社會主義と生存競争(九)宗教の使命(十)僧侶と新聞記者と教員
- 第七講 哲學の科學化—コントとヘツケル(一)哲學と科學の闘争(二)コントの功績(三)個體は種屬を繰返す(四)コントの人間發達論(五)個人心理と人類心理の類似(六)科學の分類(七)科學の研究法(八)科學の發達階梯(九)コントの空想
- 第八講 社會主義犯罪學—ロンプロソーとフェルリ—(一)眞理に國境あり(二)ロ氏犯罪學の社會的意義(三)ロンプロソーの功罪(四)トゲ一本の力(五)自然と犯罪(六)社會が産む犯罪(七)戦争と兒童の刃傷沙汰(八)犯罪學生(九)犯罪醫術(十)無定期隔離
- 第九講 保守的ヘーゲルと革命的ヘーゲル—スチルネルの無政府主義(一)結果は豫想を裏切る(二)妖魔無政府主義の正體(三)保守的ヘーゲル(四)革命的ヘーゲル(五)ヘーゲル哲學の矛盾(六)偶像から偶像へ(七)スチルネルの四靈(八)ヘーゲル左黨の完成
- 第十講 單稅論の正體—資本主義の辯護人—ヘンリー・デヨード(一)土地と資本の争ひ(二)勞働階級が漁夫の利(三)地主に對する義人の叫び(四)スペンサーとヘンリー・デヨード(五)マルクスの烟眼(六)利子の悲哀(七)烟眼なる卑盲目なる編蝠(八)ヘンリー・デヨードから社會主義へ
- 第十一講 資本主義と無政府主義—スペンサーの社會有機説と個人主義(一)資本主義の兩面(二)争むべき二つの錯誤(三)コントとヘツケル(四)社會と個體(五)社會と個體の異同(六)西人と利潤(七)政策、學問を裏切る
- 第十二講 認識論と唯物論—カントとカウツキー(一)唯物的認識論(二)兩派論の思想(三)カントの認識論(四)カント説と唯心論(五)唯物論との衝突(六)現象と實在(七)一種の唯物論者(八)カウツキーの批評

33L38

終